

Voice of SESSION HOUSE 2022

2023年4月20日発行

卷頭言

コロナ禍と戦禍を乗り越えて

今私たちが住む世界は、コロナ禍に追い打ちをかけるように、ウクライナやミャンマーでの戦争はますます苛烈さを増し、決して安穏とした気持では過ごせないことになっています。2022年、そうした困難な世界の中で一人ひとりのダンサーや振付家、制作者は、さまざまな想いで多様な活動をやってきました。「たかがダンサー、されどダンサー、たかがアーティスト、されどアーティスト」の心意気で皆頑張ってきました。

2022年には「ダンスの力プロジェクト」と題して、「家族の今昔物語」のシリーズで3作品を創出しました。笠井瑞丈は父の笠井叡をはじめとして一家そろってダンスに生涯をかけてきた物語「喜びの詩」を創りました。鯨井健太颶は、祖父の沖縄戦線での体験の手記を基にした「アーカーシャの唄」で、平和への想いを作品化してきました。マドモアゼル・シネマは振付の伊藤直子の祖母の写真花嫁としてのアメリカ移民体験を基にした作品「女は旅である」を創りました。また毎年趣向を変えて実施している「ダンスブリッジ」は秋に「3つのダンス」として5企画を実施し、舞台経験の豊富なダンサー15組が作品を発表。中でも1991年のセッションハウスの設立時からバレエ・クラスを担当し続けてきた尾本安代が久しぶりにセッションハウスの舞台に立ち、ソロダンスで「白鳥の歌」を踊ってくれたことは特筆に値することだったと言えるでしょう。昨年、埼玉の彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督になった近藤良平は、大劇場で大掛かりで新たな企画を立ち上げる一方で、活動を始める契機となったセッションハウスのような小劇場でも、独創的なセッションに精力的に取り組んできました。今年もその姿勢を崩さずに、突き進んでいます。そして次代を担う若手ダンサーたちも「ダンス花」「アカイクツ」「リンゴダンスマジック」などのプログラムで、多様多彩な作品を発表してくれました。

さらに私は以前から、地元・神楽坂との地域的な関係の深化を模索してきましたが、古典空間の小野木豊昭氏が古典芸能とマドモアゼル・シネマとの異種格闘技の面白さに着目し、2年前からセッションハウスと毘沙門天の境内でのセッションを企画して下さいました。今年も古典芸能者との共演を考えておられ、これからが期待の大動きとなっています。一方、2階のギャラリー・ガーデンでは、昨年42回に達した渡辺一枝さんのトークの会「福島の声を聞こう！」が、帰還困難地域から避難している方の布絵展を同時開催するなど、ともする



と風化しかねない原発事故の記憶を忘れてはならじとの活動を続けています。 そうした方々の多様な声に耳を傾けて下さい。 (記:伊藤孝)

Voice of Kondo Ryohei

2022年4月から彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督になった近藤良平に、大劇場とセッションハウスのような小劇場での活動の可能性について語ってもらいました。

近藤良平インタビュー

Q:さいたま劇場の他にも各地でいろいろな活動をしているけれど、どうやって時間の割り振りをしているのか大変なことだと思いますが、大きなシステムの中では、どの程度の時間拘束されているでしょうか？

K:拘束されている時間は、財団があって僕のやるべき仕事は年間プログラムなどの書類を確認してハンコを押したり、そういう時は一週間かかったりします。でもその他はそれほど拘束されることはないです。でも実質上芸術監督になって初めの去年は4月から8月の半ばまではほとんど毎日行っていましたね。



Q:その埼玉で最初の良平さんの企画のクロッシングというコンセプトによる公演を見に行きましたけど、ダンサーの他に演劇畠の人や生バンドからサーカス芸の人などいろいろなジャンルの人が出る大掛かりな舞台で、大劇場ならではの企画でしたね。そういうもので良平さんにとって新しい挑戦だったという想いはありますか？

K:そんなことはないですね。まだそういうことを試みた程度でしたね。呼ぶだけは簡単ですけど、中味はこんなので良かったかなという想いはありますね。本当にやりたいのは時間のかけ方とかで、最低でも1ヶ月拘束とかしなければと思います。その中で20回公演とかやれるようになれるかですね。ダンス公演だとリハーサル10回くらいでやっても2,3回公演ですからね。ですから大劇場ではどれぐらい拘束出来るかが問題ですね。そういうことで大きい所には難しい部分がありますね。

Q:クロッシングのような企画を年に何回ぐらいやってほしいとの要望は出ているんでしょうか？

K:そういう要望は出ているっていえば出てるし、僕次第ですよ。ちょっとずつ意味合いが違うクロッシング・パターンというものを考えています。

Q:それは一方で言えば何作になりますか？

K:公式に言えば2作品ですが、昨年は見ていただいた「新世界」で、次にはコンドルズの公演で、その後は「導かれるように間違える」という芝居でした。いろんなパターンですね。夏には「オープン・シアター」と言って、劇場のあちこちの場所を使ってダンスを見せる劇場紹介のようなこともやりました。それは「ダンスの星に生まれて」というタイトルでやりました。

場所を紹介する社会科見学のようなものでした。

Q: 見る人がダンスに参加するというものとは違いますね。

K: それは今後の問題です。さいたま劇場は県のホールですから、その意味から埼玉県とどうつながるかを考えるために、埼玉の各地を見て回っています。それを基にクロッシングを考えたいとも思っています。

Q: そうした中でセッションハウスのような小劇場でも公演をやったり、ワークショップをやったり、クラスをやったりしてくれていますが、小劇場の位置づけをどのように考えていますか？

K: ここは大きい所ではないけど、最初にここに来た時なんかは、知らないことが沢山あったので、僕にとっては何もすごく大きな意味のある場所でした。ものを考える原点とでも言いましょうか。そうした意味合いでセッションハウスの役割はものすごくありますね。ここでやっていることはあまり変わってなくて、プレがないじゃないですか。一人で考え試すことも出来るし、作品を創って見たりするのに、結構コンパクトにやれることがありますね。埼玉の劇場などは組織が大きいので、それと比べるとここは動きやすいですね。

Q: 良平さんにとっては今両方があるのはいいことですか？

K: それはそうです。ここは人と簡単に会える感じですね。ただ今はオンラインで見る人も多いので、劇場に足を運んでもらえるようにするにはどうするかが困難な時代ですね。

Q: 企画監修の伊藤直子もお客様集めに苦労していますよ。

K: ここは照明の美穂ちゃんや音響の上田君などでアナログの手作りの良さがあって、何物にも代え難いものがありますね。

(インタビュー:伊藤孝)

Voice of Kasai Family

「ダンスの力プロジェクト～家族の今昔物語」の第1弾として作品を発表したのは、家族揃ってダンス界で活躍してきた笠井一家。ここ3年間は家族で作品を発表し続けてきました。その中で考えてきたことを、笠井瑞丈と父の笠井叢が語ります。

コロナ元年 2020年から考えたこと

笠井瑞丈

コロナ元年の2020年、世界は未知のウィルスとの戦いが始まった。その年8月にセッションハウスで笠井家の公演を上演させてもらいました。元々はコロナ以前に伊藤直子さんとオリンピックの頃に何か面白い事をやろうという話から始まったのですが、同年2月ごろからコロナ問題が勃発してしまい、人と人との距離が変わり、多くの公演が中止を余儀なくされました。そんなまだ経験した事のない危機に、近くにいる家族という共演者と共に、何か出来ないかという思いで作品作りを始めました。その時まだ三作つくるとは考えていましたが、結果翌年にも新作を作り、そして翌々年にも新作を作ることになりました。二作目を作った時には三部作にしたいという考えがありました。

カラダというのは不思議なもので、何か困難にぶち当たった時、それを跳ね除ける力をカラダは持っています。もの作りは、そのような力を創造の力に変えていく事だと思っています。それが創造活動の根底なのではと私は考えています。困難はある意味、新しい世界の始まり

を意味しているのではと思います。2020年1作目『世界の終わりに四つの矢を放つ』未知の世界の始まりに、身体をどのように提示して行けば良いのか、というのがテーマでした。2021年『霧の彼方』世の中はまだ前が見えない霧に包まれていた、しかし遠くの彼方には小さな光が、目まぐるしく変わってしまった新しいシステムに、少しづつ適応できるようになり、またそこから新しいものを生み出そうという年になりました。2022年『喜びの詩』三部作の最後の作品。舞台に立つ喜び、そしてお客さんに立ち会ってもらえる喜び、初めて見る景色の喜び、そんな色々な思いを込めて作った作品でした。三作ともやはり共通しているのは、コロナという問題で起こってしまった世の中の変化に、どのようにダンスを提示していくかという事でした。特に2020年は公共施設やスタジオもクローズしてしまい、人が集まるという事も難しい時期でした、常に中止というリスクのある中で、どのように作品を作り、どのように公演まで持っていくか、そして今公演することの意義などを考えました。そんな中、三年間で三作、セッションハウスで出演者全員笠井家という、少し珍しい公演ができた事は、私にとってとても大きな出来事でした。コロナという問題が生じなければ、きっとこのような公演を立ち上げようと思わなかったと思います。そしてセッションハウスも同様、この危機をどのように乗り越えていくのか大変だったと思います。いち早くオンラインを導入し、公演の人数制限がかかる中、なんとか公演を絶やさず続けてきたと思います。そして今もまだ危機は終わったわけではなく続いている。この先の世の中がどのように変化していくのか全く分かりませんが、カラダを持つ以上、これからも如何なる困難にも立ち向かっていかなければいけないと思っています。



リアリティの意味を問い合わせ続けて

笠井 叢

2020年の1月頃から、或いはもっとそれ以前から生じていたというコロナ世界の大流行が始まっているから、僕自身の中では、常に二つの方向に分裂させられるような生活が始まっていたと思う。別の言い方をするならば、自分の中において「リアリティ」という言葉の意味が分裂していた、ということであるかもしれない。コロナ流行が始まっているから、あらゆるメディアから送り届けられる統計学的数字や世論、また自分自身の中でもリアリティの持ちえない専門的に、一方的に与えられる科学知識や、「医療崩壊」という重い言葉で、その実態は自分の中でイマジネーションを通してリアリティを獲得するしかない様々な出来事に、ずっと晒され続けてきたと思う。だからそのような世界から逃れようと思うならば、そしてまた、そのような生き方を自分が真に望んでいるとするならば、自分も現在の生活すべてを投げうって、大流行が引き起こしている様々な現場にボランティアとして入り込み、自分が現在の医療現場で何ができるかを懸命に模索するしかないのかもしれ



ない。そしてそのことは自分にとって、これまでの自分を変える大きな意味がきっとあるに違いない、と想像することも十分にできる。今回のような世界的な規模の社会的カタストロフィが僕に突きつけていることは、だから「自分」と言う一つの存在の「無力さ」である。この無力さは「ウクライナ戦争」という歴史的なカタストロフィの中に置かれている自分自身についても同じである。「始まりも終わりもない無意味な世界戦争」「暴力性を全く克服することができないホモサピエンス」という明らかな事実を前にして、自分は全く無力なのである。一体何ということだろう！もちろん、僕にとってこのコロナ大流行がアーティストのない統計学上の問題という意味ではない。事実、その事によって僕自身の生活は全く一変してしまった。ダンサーとしての自分にとって、観客とともに、「舞台に立つ」ということは、その活動の中で最も重要なことであるには違いない。そして僕は二つの重要な舞台を断念せざるを得なかった。多くのダンサーたちが経験してきたように、僕自身、ご多分に漏れず、舞台作品を作るために何ヶ月も、何年もかけて行ってきたすべての事柄を、中断するか、或いは断念せざるを得なかつたのである。そしてこのことが確かに、自分自身にとってコロナ大流行がもたらした、ポジティブな意味でも、ネガティブな意味で一番大きな「アーティスティック」と呼べることであるかもしれない。創造に向けて準備してきた事柄が実現できないというの、人生をひっくり返すくらいの大きな出来事である。具体的に言うならば2020年の春に行われた川口隆夫、笠井瑞丈ダンスによる『DUOの會』が公演半ばで中止になったこと。また2022年の秋、その再演『DUOの會』と、それに引き続き行われた新作公演『櫻の樹の下には』一カルミナ・ブランाを踊る一の舞台において僕自身は、コロナ陽性により、この二つの舞台の降板を余儀なくされたのである。一年間準備した公演のためのカテゴリーは舞台上に出演したダンサーたちにとっては別であるが、僕個人の中では実現しなかった。しかし正直に言おう。皆とともに、舞台に立てなかつたことは痛恨の極みではあるが、一方、「これが舞台をするというアーティスティック」だと真に思えたことなのである。強がりで言うのでも何でもなく、僕は二つの舞台を現実に参加する以上に、参加していたように思えるのだ。そしてその思いはいまだに一つの「生きるエネルギー」として、力を持ち続けている。それは舞台に至るまでの様々なカテゴリー、準備、稽古、話し合いを、皆と共有してきたという事の方が、舞台そのものよりも重要であるということを、言おうとしているのではない。自分でもよくわからないけれども、今も明らかに自分の中で生じているのは、「ダンスする」という事の根源は一体何なのか」という、最も原初の地点に立たされているということである。その問は「生きるアーティスティックは一体何なのか」という問とぴったり重なっている。この問いはあの舞台が遠ざかるに従って、さらに強まってくる。そしてこのような心的状態は、もし現実に舞台を行っていたならば、生じなかつたのかもしれない。そのことで自分に納得できたことが、ひとつある。舞台を行う



ということの最重要的意味は「動機そのもの」の中にある、ということだ。今、現実の舞台上に実現しなかった二つの公演への「純粋な動機」はダンスすることの「心臓」であるように感じられる。そしてこの「動機」という「心臓」がカラダの中で打ち続けるかぎり、ダンスのリアリティは消滅しないだろう。

(2023年1月23日記)

Voice of Kujirai Kentaro

「家族の今昔物語」の第2弾として、祖父の戦争体験記を基に、朗読やコーラス、沖縄舞踊などを交えてダンス作品「アーカーシャの歌」を発表した鯨井謙太郎の声をお聞き下さい。

「アーカーシャの歌」に籠めた想いは

鯨井 謙太郎

私はこれまでダンス作品を政治的主張と結びつけて創作したことはありません。とはいえ、ダンスが身体そのものを作品としている以上、身体の来歴や記憶、過去との繋がりと無関係にはいられないと思います。身体芸術は、身体という具体的・物質的な側面と、コンセプチュアルなものを規定精神的側面という両極性を含みます。それを肉体行為と頭部の思考活動、と言い換えることができます。また骨や肉があり、血液の巡るこの人間の身体には、何十億年という地球の記憶、そして創世以来の人類の歴史が眠っていると想像します。吐き出された息や発せられた声の響き、空間を切る身振り、それらがこの大気には透明な地層となって刻印されているかもしれません。もしこの細胞の記憶に耳を澄ませてみると、身体は個人の記憶を超えたもの、あるいは空間を超えた集合無意識的なものと共振し始めるのではないでしょうか。今はもう存在しない街や絶滅した生物、祭りごとや伝統芸能、民族のアイデンティティを形成する文化の連続性、さらには遠く離れた地球の裏側で起きている出来事とも。



そのような共振的な観点から、身体芸術と社会的事象の関係について考えた時、コロナ禍、東日本大震災における福島原発事故、2001年9月の同時多発テロ、90年代のオウム真理教についての一連の恣意的なメディア報道など、同時代を生きている人々が意識的/無意識的に共有してしまう事象とダンスは無関係ではいられません。しかし同時に、私は個々の作品から表出されるメッセージより、その作家の身体観にまず興味が向きます。ダンスにおいて「私/主体/振付家」と「身体/客体/ダンサー」の関係性は最もミクロな社会の構図であり、身近な権力構造の表出する場(政治の現場)と考えることもできるからです。振付やムーブメントにおける主体と、それを具現化して動く身体との関係性において、そこにいかなる「自由」が生み出されるか、それとも軍隊組織のような権力的な支配構造が生じるのか？このことは他者と協働する創作現場のあり方に直結してくることでしょうし、その作家の作品スタイル(身体観)に現れてくる気がします。個々の作家の身体観を掘り下げてゆくと、そもそもダンスの主体とはどこにあるのか？という迷宮の中へと入ってしまうわけですが、しかし、この問いは私にとってはダンスの始まりの在りかに繋がってきます。短距離走のように

「位置について、よ～いドン！」の号令で身体を動かそうとしても、ダンスは始められないのです。私にとって何かを創る一番始まりのところ、身体の源泉から衝動が生まれてダンスになる瞬間というのは、ふと彼



アナキズムの問題、権力と自由の問題にまで直結してくるのではないかでしょうか。北緯30度10分以南、東経122度30分以東。この記号は、本土から切り離され、日本人と非日本人を残酷に隔てた深淵となって、今もこの身体に刻まれその奈落を覗かせています。私個人の人生を超えた記憶を眠らせたまま生きていくこともできるのかもしれません。しかし、一度目醒めた記憶とどう向き合っていくのか、願わくばそこに未来からの呼び声を聴き取りたいと、この「アーカーシャのうた 鮎井巖著『一学徒兵の北部沖縄戦回想録』」を踊りました。

Voice of Takenoshita Tamami

「家族の今昔物語」での第3弾として「女は旅である」を踊った演者一人、竹之下たまみが作品に籠めた想いを語ります。

100年先に何を残すか

竹之下たまみ

「家族の今昔物語」という企画のもと、マドモアゼル・シネマは100年前に写真花嫁として海を渡った少女たちを描いた「女は旅である」の公演を行った。場所は拠点であるセッションハウスと、数年前に縁があつて繋がった和歌山県串本の田並劇場。串本は、かつてこの地から日本人が海外に旅立ち、移民として生活した人々が多くいる地域だと伺った。実際に串本で見た海は、晴れている日には日の光でキラキラと輝き、遠くの水平線がまっすぐで、その先には希望に溢れているように見えた。実際には移民として生活していく中で、過酷な労働と、戦争に巻き込まれて収容所生活も強いられる。写真花嫁たちの希望と勇気と絶望。陰と陽を同時に感じた。そして、そのような地域で、「女は旅である」を踊ることは、何か自分が歴史の語り部になったような、本当に100年前の出来事を経験したような、そんな不思議な感覚と責任を大きく感じた。「家族の今昔物語」はその他に、鯨井謙太朗さんの「アーカーシャのうた」、笠井瑞丈さんの「喜びの詩」の2公演があり、いずれも脈々と続く家族の繋がりを感じる作品で、見終わった後にこれまでの歴史に思いを馳せたり、この先の未来を考えたりしつつ、時間の流れを身体で味わうことができた。



これらの家族物語で描かれるのは、何か偉業を成し遂げた人ではなく、普通の、市井の人々の話である。歴史は強者の視線で語られることが多く、声の大きな方が正義となりがちであるが、その裏には名もなき人々のたくさんの歴史が眠っていることを忘れてはいけない。100年先というと、自分という形は残っていないかもしれないが、子ども世代・孫世代が関わる時代を考えると、さほど遠くはない未来の話。過去を知り、今を見つめ直し、未来を見据える。この企画は、ダンスがそのことを考えるきっかけとなる得ることを証明した。この意義ある企画に参加できたことを誇りに思う。

Voice of Mochizuki Takahiro

2022年の「ダンスブリッジ」は趣向を変えて「3つのダンス」と題して5駒の公演を実施しました。そして公演だけではなくオンライン配信とアフタートークとズームトークを行い、作品の理解度を高める試みもしました。コーディネーターからの声をお聞きください。

2022年ダンスブリッジ報告

コーディネーター：望月崇博

2022年のダンスブリッジは全5公演が行われ、各公演でテーマを共有する15団体が参加をした。順にボレロを主軸とした作品創作に挑戦した「3つのボレロ」、新進気鋭の振付家による「3つの未来」、映像や音響によってバーチャル世界の出現に挑戦した「3つのバーチャルリアル」、白鳥の湖をテーマとした「3つの白鳥」、ヒーローをテーマにした「3つのヒーロー」であった。コロナ感染拡大以降、上演芸術の集客率低下は免れない状況下で、コンテンポラリーダンスの面白さを再確認し発信することを目的とし、新たな試みとして、①「事前レクチャー動画配信」(振付家によるテーマや題材の歴史についてのインタビューを動画配信)②「公演」、③「事後トーク」(各公演後の水曜夜に観客、出演者参加のZoomを活用した感想会)の3段階を設けた。「事前レクチャー動画配信」について、例えば「傑作ボレロへの振付家としての立ち向かい方」「ダンスとバーチャル世界融合への未来的飛躍的談話」「バレリーナの日常とバレリーナにとっての白鳥の湖」というようにダンスを中心とした様々なジャンルの話を動画配信した。それによって作品創作の内部やそれぞれの振付家のダンスの捉え方が垣間見えるものとなり、作品鑑賞のための良き前段階になったと言える。ただし、数値的な側面からは各回の動画視聴を総計しても1000回ほどに留まり、周知の方法に課題が残るものとなった。次に「事後トーク」において重視したのは「観客主体の参加」であった。鑑賞後から次にどのように繋げるかが現代アートマネジメントにおける課題の1つであり、作品から享受したものを誰かと共有することで発展的な作品鑑賞になるのではないかというところが解決の糸口になるとを考えた。コロナ以前であれば鑑賞後に居酒屋などで観客同士あーだこーだと話していた機会を模して、振付家も巻き込んだ場として仕組みづくりを試みた。コーディネーターの誘導の元、振付家の作品創作の内側や着眼点、作品解説に加えて、各ダンサーによる他の振付家作品の捉え方、観客の疑問点の解消、ダンサー同士の昔話など多岐に渡り、作品を掘り下げる作業が出来、創る側にも観る側にも収穫の有るものとなった。主観的になるが土日の上演から数日空けた水曜に「事後トーク」を設定したことが、作品を反芻する時間となり良い機会となった。鑑賞後に残っているダンスの断片を基に「なぜ残っているのか?」という純粋なところから始まり、断片同士を繋ぎ合わせたり、組み替えたりすることで新たな作品解釈が生まれた。「わかりにくい!!」と言われるコンテンポラリーダンスにおいて、「事後トーク」での糸が解ける感覚、新たな糸が絡み合ってくる感覚は自分の思考を拡張してくれるものであったし、この二次的鑑賞にコンテンポラリーダンスの秘めたる可能性があるのではないかと考える。テーマを共通にしたことに加え、作品を深掘りできることでコンテンポラリーダンスの持つ「多様性」

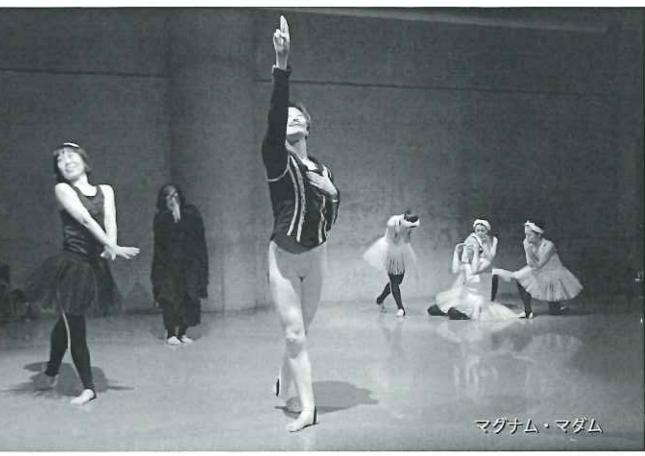
にさらに焦点が当たられ、ダンスの特質=個人の特質とも言うべき現象が把握できた。人が集まるライブ(上演)という形態のぜいたくな鑑賞と、オンラインで集まり探求していく終演後の鑑賞追体験の二つの方法が合わさり、今後の観劇の一つの在り方として提示できたことが今回の成果となった。この成果を継続し、今後も終演後の「鑑賞追体験会」含めた観客の舞踊鑑賞と舞踊上演に尽力していきたい。結びに小噺。「3つのヒーロー」での良平さんの作品でアルゼンチン代表の10番のユニフォームを着た良平さんが転びPKを蹴るシーンがあった。その数時間後のW杯決勝でメッシが倒されPKになった。メッシはPKを決め、優勝し、まさに「ヒーロー」となった。ダンス鑑賞で得られた断片が繋がった面白い鑑賞体験であり、おそらく忘れることがない記憶となった。



柿崎麻莉子



ブッシュマン



マグナム・マダム

Voice of Omoto Yasuyo

谷桃子バレエ団の中心的メンバーとして活躍し、1991年のセッションハウスの創設以来、バレエ・クラスを主宰してきた尾本安代が昨年久々にセッションハウスと横浜の舞台に立ち、「ダンス・ブリッジ」で「白鳥の歌」と題してソロ・ダンスを披露しました。

「白鳥」を踊って

尾本安代

「ダンス・ブリッジ」で『白鳥』をテーマに何か踊ってみませんか?と伊藤直子さんから提案頂き本番を迎えるまで1年の月日が流れました。どのような作品を創るのか、なかなかアイディアは浮かばず、若手コンテンポラリー振付家として活躍している苦野美亜さんに相談しました。この数年間に苦野作品を何度か見る機会があり、毎回その作品の世界感に惹かれていたからです。



2022年は1972年に谷桃子バレエ団に入団し舞台活動を始めて50年目の節目なので何か今の自分に出来るダンス表現をやりたいと強い想いがありました。でも10年ほど前に脊柱管狭窄症になり回復して来てはいるものの身体表現をするのに心は踊っていても動けるテクニックは限られている状態が現実にはありました。苦野さんとのディスカッションの時間を経て作品のための映像を撮影に夏の終わり頃、神奈川県三浦半島の海岸に行きました。その絶景の海辺に立った時、エネルギーを貰えた気がしました。そして12月3日の本番まで映像、衣裳、照明、音楽など様々なアイディアが結集し形となり『白鳥の歌』は創られました。セッションハウスの地下スタジオで踊る時は他の場所とは違う独特な空気を感じます。『白鳥』をテーマに踊った坂井美乃里さん、マグナム・マダムの皆さんと『3つの白鳥』が揃い本番2日間の楽屋ではそれぞれに緊張感もありながらバレエ談義も楽しい時間を過ごせました。そして、このセッションハウスでの公演後、暮も押し迫った12月29日に再び「苦野美亜プロデュース公演」『mid/point』と題したDANCE Performance LIVEで『白鳥の歌』を踊る機会を得ました。会場は横浜ランドマークホール。観客との一体感を感じられる密なセッションハウス地下スタジオとは対照的な何倍もの広さの空間でした。そして観客席は固定席ではなくそれぞれ会場のセンター、壁際、黒幕があるスペースへと移動しながらの周遊型鑑賞スタイル。この公演では『白鳥の歌』の前に若手コンテンポラリーダンサーや舞踏家の方と音楽家の方達も入った2つの作品があり、私が着ている衣裳の黒いワンピースから繋がっているスカートを前作品のダンサー達が持ち床いっぱいに広げるところから3作品目が始まりました。

両方の公演を見て下さった方からは同じ作品だけれど少し違う印象を受けたとの感想を頂きました。再演では空間の違いには多少の意識はありましたが同じ心地良い緊張感を感じて踊っていました。自分で無意識でも踊る度に心は違う感覚を捉え、新しい発見をしているのかも知れません。今回この作品を踊らせて頂き、企画から作品創りに関わって下さっ

た全ての皆様に、そして観客席で同じ空間を共有して下さった皆様、配信を見て下さった皆様に心より感謝しています。

Voice of Onogi Toyoaki

セッションハウスがある神楽坂は古い日本文化の香りもする地域ですが、古典芸能の制作者である小野木豊昭氏が中核となって、セッションハウスのダンス・プログラムとの連携を推進して下さっています。その小野木氏からの熱のこもったメッセージです。

コラボレーションへの期待

伝統芸能プロデューサー
古典空間代表: 小野木豊昭

少なくとも2020年までの日本の社会は、経済的価値を求心力に前進と上昇を繰り返してきたと言えよう。コロナ禍は、その勢いに急ブレーキをかけると同時に暗示を与えたように思えてならない。前進と上昇を一時休止…「間」を置いて、後方と下方に視線を移し、過去に蓄積された足元に在る価値へ着目することである。蓄積こそ「伝統」という言葉に置き換えられはしないだろうか。

「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり」(主催: 公益財団法人東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京/NPO法人粹なまちづくり俱楽部・助成・協力: 東京都)というイ



ベントが2013年より行われている。5月中旬の土日両日、毘沙門天善國寺、赤城神社、矢来能楽堂、ライブハウスから老舗店舗、また神楽坂通りと周辺路地ほか、神楽坂界隈が伝統芸能で埋め尽くされるのだ。箏、琵琶、三味線、胡弓、尺八、笛、小鼓、大鼓、太鼓…など日本の伝統楽器が奏でる各種音楽、舞楽、能、日本舞踊、そして講談、落語、浪曲、太神楽から手妻に至るまで、現在一線で活躍中の方々が、各所同時多発にて20分程度のライブが次々に展開される。伝統文化が息づく神楽坂という「まち」を舞台に、日常の中で接点が希薄となりつつある伝統芸能との「出逢い」を演出する東京都の文化事業でもある。中でも特筆されることは、神楽坂…まちの方々と共に上げるイベントであるといふことだ。事前に伝統芸能の諸情報を学び、お客様への説明などを担当するコンシェルジュ、歴史ガイドやスタンプラリーのご案内などを担当するボランティア、また会場として各施設をご提供下さる皆さまほか、多くの方々のご尽力なしには成立しない一大事業にもなっている。今年で11回目を迎えるが、神楽坂の初夏の風物詩とも言えよう。コロナ禍前は、毎回4万人前後のお客さまがご来場くださり大きな賑わいをつくり出していたが、ご多分に漏れずコロナ禍の煽りを受け、2021年は屋内で無観客配信による実施となった。5月23日、セッションハウスでは、津軽三味線・尺八・ピアノ・ドラムス、四人の演奏家によるライブ・セッションを行った。日本の楽器も西洋の楽器もなく、まさに楽しみながら音を紡ぎ出すことを信条としている腕利きのプレーヤーたちが、緊張と弛緩が反復される心地よい空間をつくり出してくれた。そして最後の演奏樂曲「こりきこ節」で、マドモアゼル・シネマの皆さんとのコラボレーションが実現したのだ。音楽と身体表現が呼応し合うことで、激しく昂まる内面が飾ることなく表現された。実際に刺激的な創造で深く刻まれている。お客様との対峙が叶わな

かったことが悔やまれてならない。昨年は状況好転を受けて有観客での実施が可能となった。5月21日、場所は毘沙門天善國寺、本堂に上がる階段をステージに、低音箏である十七弦とのコラボレーションが実現した。祈りをテーマに繰り広げられた「会話」は、あたかも音とダンスがお互いの隙間を埋めつつ、差し伸べられるが如き救いの空間をつくり上げていたように感じた。何故か清々しい心持ちはなった。箏とコンテンポラリーダンス、そして寺院、まさに三者が一体となったコラボレーションであった。さまざまな事象がボーダレスになりつつある今、パフォーミングアーツの世界でもコラボレーションは頻繁に行われている。出自や背負った背景などを超えた表現同士が出逢い、刺激し合いながら新たな表現や作品が生まれることは、アートの存在意義そのものだ。一方、分断や闘争が現実の社会ゆえに、アートが果たす役割が大きくなってしまうべきである。異ジャンル同士で共感するテーマを共有し、テーマを求心力に協力を重ねつつ創造に向かう作業ゆえに、何らかのメッセージが生まれ、何かが伝わるのだ。さて、伝統芸能…芸能の上に「伝統」という言葉が付加されることにより、とりどりのイメージが広がるようだ。伝統の重みと価値を実感する方もいれば、「難しい、古臭い、とっつきにくい…」などの思いを抱く方も多いはずだ。若い世代になればなるほど後者が現実であろう。言葉の壁、表現のスピード感、事前知識の必要性など、伝統芸能には“ハードル”が多々存在することを先ずは認めて取りかからなければならない。対して前者は「過去の日常文化の中から生まれた優れた表現や作品で、時を経ても、場所や言葉が異なっても、受けとめた人の明日を生き抜く精神の糧となり得るもの」と解釈するならば、しかもそれが日本の風土で生まれ培われたものならば、尚さらあらゆる世代を超えてその価値の共有を図りたい。受け継がれるには理由がある。またそのプロセスで洗練が繰り返されて様式や型が出来上がる。だからその様式と型にこそ、伝承の意味と本質を見て取ることができる。また様式と型は反復するだけではなく、新たな創造へのアプローチに応用することで、新鮮さを保ち同時代性を獲得してゆけるのだ。いずれにしても「面白く、楽しく、カッコいい」要素を、本質を見失わずにいかに抽出して提示するかが腕の見せ所と心得ている。とは言え正解はなく、実験と実践を繰り返すのみである。「神楽坂まち舞台・大江戸めぐり」は、伝統芸能との出逢いの場であると同時に、扱い手にとっては現代的課題である「伝承・普及・創造」を実践する絶好の機会にもなる。次回は、邦楽囃子とマドモアゼル・シネマの皆さんとのコラボレーションを通して、「間」からのメッセージをお届けできたらと考えている。

ダンス・プログラムを支えたセッションハウス・スタッフ

照明: 鈴村美穂、鈴村淳/音響: 上田道崇、蓮子奈津美
舞台監督: 鍋島峻介、蓮子奈津美/美術: くに若尾/衣裳: 原田松野
映像: 上田道崇、中島詩織、原綾香、秋元麻友子、川崎陽恵、
田代さつき、染宮久樹/写真: 伊藤孝、山之上雅信

会場スタッフ: 竹之下たまみ、高橋志帆、古茂田梨乃、井口智恵、新堀佳奈、原綾香
制作: 伊藤孝、伊藤直子、鍋島峻介、鈴木加奈子
※なお、セッションハウス企画室は2022年2月から一般財団法人となりました。
スタッフ一同いっそうの企画の充実を図って活動を展開していく所存です。

ダンス・プログラムを支えた団体

日本芸術文化振興基金、文化庁文化芸術活動の継続支援事業、アーツカウンシル東京、株式会社セッションハウス、ハニカム基金

2022年 ダンスプログラムの軌跡

| | | |
|-----|--------|---|
| 1月 | 14・15日 | 近藤良平・リンゴ企画 「正直者は笑い死に」(3回公演) 出演・構成・振付: 近藤良平、笠井瑞丈 |
| | 22日 | 「アカイクツ」(2回公演) 4組の女性振付家による合同公演 R6Project(出演: 荒木厚子、荒木舞、こばやし和也、小林佐和子) 高橋志帆(出演: 高橋志帆)坂田有紀子(出演: 古茂田梨乃、平多理恵子、山羽真実子、坂田有紀子)三浦香織(小笠原等香、三浦香織) |
| | 29・30日 | シアター21フェス vol. 126(2回公演) |
| 2月 | 6日 | 「ダンス花」(2回公演) 若手ダンサーを5組選出した次世代を担うダンサーの発掘公演 山口なぎさ/今井琴美、白鳥雄也/岩城かのこ、高橋春(振付: 木原浩太) 村上結奈、竹内春香(田中直美、堺祐梨(振付: 森崎麻莉子) |
| | 12日 | ジョン・ラッセル追悼公演(2回公演) 出演: 田中源、坂田明、池田謙 |
| | 27日 | ダンスブリッジ・ノベルの衝動「花の名前」(1回公演) 振付: 中村喜 |
| 3月 | 5・6日 | University Dance Cross 21th「ふいに舞え」(3回公演) 大東文化、尚美學園、多摩川美術、武蔵川女子、武蔵野美術、日本大学芸術学部、お茶の水女子、大阪体育、芸術文化観光専門職の9大学から35名参加 |
| | 12・13日 | マドモアゼル・シネマ「彼女の椅子」(3回公演) 振付・演出: 伊藤直子 出演: マドモアゼル・シネマ(竹之下たまみ、蓮子奈津美、中島詩織、秋元麻友子) マドモアゼル・メイツ(工藤えは、白瀬虹沙、田代さつき、藤田さくら、吉田ひなこ、渡邉茜)朗読: 郷亜美 |
| 4月 | 27日 | 近藤良平ソロ公演「夜のカフェテラス」(1回公演) |
| | 17・24日 | 尾本安代こどもバレエクラスマーチネス発表会(3クラス公演) |
| | 23日 | 酒井亜矢・夏貴陽子タッグ公演「SUGATA」(2回公演) 出演: 大川麻衣子、片瀬雅子、AlysSa、松本絵莉子、山本純子、小野寺友也、酒井亜矢(あややん)、夏貴陽子 |
| 6月 | 11日 | シアター21フェス vol. 127(1回公演) |
| | 18日 | D-zoneフェスティバル asamicrof「Drawing in Breakfast」(2回公演) 出演: asamicrof/TAIKI /Novel Nexus/ygru/愛由/高橋春香/NAKI |
| 7月 | 2・3日 | D-zoneフェスティバル・佐藤琢哉「Vortex」(3回公演) 出演: Dance Project A[angstrom](佐藤琢哉、梶田留以、岡本優香、鈴木夢生) |
| | 9日 | 小川麻子「Fallo... Vol. 4 ももしも」(2回公演) 振付: 小川麻子 出演: 小川圭子、中井結加里、永濱佑子、中村若葉、長谷川麻里子、横尾英志、小川麻子 |
| | 21・22日 | マドモアゼル・シネマ 家族の今昔物語「女は旅である」「赤い花・白い花」(4回公演) 振付: 伊藤直子 出演: マドモアゼル・シネマ(竹之下たまみ、蓮子奈津美、中島詩織、秋元麻友子、佐藤郁、仲野朱音)「赤い花・白い花」出演: 江口力斗、古茂田梨乃、櫻井拓斗、高橋志帆、望月崇博 |
| | 30日 | D-zoneフェスティバル 向田聖子公演「大手拓次の世界・カルメン」(2回公演) 出演: 持木弘、向田聖子、サンセレッソバエ&スペイン舞踊カンパニー ソブノ: 小林麻裕弥 ピアノ: 関根操子 |
| | 31日 | D-zoneフェスティバル 尚美學園大学舞台表現学科公演「アンビバレンス」(1回公演) 振付: 三輪尚美 |
| 8月 | 7日 | 家族の今昔物語「喜びの詩」(1回公演) 構成・演出: 笠井瑞丈、笠井瑞文、笠井瑞示、上村なおか、浅見裕子、笠井敦、笠井久子(朗読)、島岡多恵子(ピアノ) |
| | 13・14日 | 家族の今昔物語「アーカーシャのうた」(3回公演) 構成・演出: 鈴井謙太郎 出演: 鈴井謙太郎、野口真(レインダンス)定方まこと(語り)、堅田衣衣(音楽監督)、Noemi Noesis ensemble(合唱)鈴井絵里加(三線) |
| | 27日 | マドモアゼル・シネマ+坪内一家 「女の旅と神話の始まり」(1回公演) 振付: 伊藤直子 会場: 和歌山県串本町田並劇場 |
| 9月 | 3日 | D-zoneフェスティバル Von no zu公演「ベレック～春の祭典四重奏」(2回公演) 振付・出演: Von no zu(上村有紀、久保佳絵ほか) |
| 10月 | 1・2日 | ダンスブリッジ「ボレロ」にまつわる3つのダンス(3回公演) マドモアゼル・シネマ、プロジェクト大山、鈴井健太郎 |
| | 9・10日 | マグナム・マダム「神楽祭～五穀豊穣と八百万の舞～」(3回公演) 振付・演出: 山口夏絵 出演: 稲村はる、歌川雅子、小川圭子、室内愛、山口夏絵、大熊絢子、田中洋平(ギター)、藤田淳子(ヴォーカル)、Voite Eva |
| | 16日 | リンゴダンスマジック 小暮香帆×坂田明・中山晃子「Night cruising」(1回公演) |
| 11月 | 5・6日 | ダンスブリッジ「未来」にまつわる3つのダンス(3回公演) 柿崎麻莉子、ブッシュマン、Organ Works |
| | 13日 | リンゴダンスマジック 中村理「いきいきといきき」(1回公演) |
| | 19日 | リンゴダンスマジック 神田初音ファラル「TRANSISTOR SISTERS」(1回公演) |
| | 23日 | リンゴダンスマジック 中村理「Metamorphosis」(1回公演) |
| | 26・27日 | ダンスブリッジ 「バーチャルリアル」にまつわる3つのダンス(3回公演) チーム鶴川、odd fish、中屋敷南 |
| 12月 | 3・4日 | ダンスブリッジ 「白鳥」にまつわる3つのダンス(3回公演) 尾本安代、マグナム・マダム、坂井美乃里 |
| | 17・18日 | ダンスブリッジ 「ヒーロー」にまつわる3つのダンス(3回公演) 近藤良平、笠井瑞丈、黒須育海 |

ガーデン活動報告

セッションハウスの2Fギャラリー【ガーデン】では、2022年も自主及び共同・協力企画のほか、レンタルの展覧会、トークの会、クロッキー会などの活動の場となった。

自主及び共同・協力企画の軌跡

- 2月 9日～13日 わわわ俳句展 (T)
 - 3月 30日～ 4月 10日 ツーゼ・マイヤー展 my lucent day
 - 5月 12日～17日 第39回修羅譜展
 - 5月 29日～ 6月 4日 内野沃八十歳展 2022
 - 7月 7日～12日 巴里祭に寄せたアート展 (T)
 - 7月 16日～17日 早稲田大学書道会平成22年度卒業生同人展『くだん』
 - 10月 4日～10日 菅原芳人 POP ART 展
 - 10月 30日～ 11月 3日 青田恵子布絵展
 - 11月 4日～ 6日 22歩展
 - 11月 8日～13日 F展 vol. 6
 - 11月 23日～28日 五人囃子 in 神楽坂 (T)
 - 12月 1日～ 6日 Noel 展 (T)
 - 12月 14日～18日 アトリエ・ロゾー展
- ※(T)は演劇美術社の豊田紀雄氏の制作企画
 ※吉田卓史主宰のクロッキー会は23回開催
 ※渡辺一枝トークの会「福島の声を聞こう！」は3回開催

ガーデンではコロナ禍の影響が減り、企画の中止などは少くなり、展覧会の数は多くはないものの、毎年恒例となったものもあって、中身の充実化を感じさせるものが多くありました。中でも渡辺一枝トークの会は、4月29日には地下スタジオに場所を移して井上美和子さんの一人朗読劇を開催。また10月30日から11月3日にはトークの会と併設して着物の切れ端を活用した青田恵子さんの布絵展を開くなど、新たな展開をみせました。そうした企画を立案した渡辺一枝さんの声をお聞きください。

Voice of Watanabe Ichie
「トークの会 福島の声を聞こう！」の11年
 渡辺一枝

東京電力福島第一発電所事故から12年が経とうとしている。あの当時、テレビニュースに釘付けになり、新聞を貪り読み、ネット情報を漁る毎日だった。テレビも新聞もネットも、さまざまを伝えてくれたけれど、私の知りたいことは、それらからは伝わってこなかった。避難指示が出されても避難せずに、あるいは避難できずに暮らす人たちもいるだろう。その人たちは何を思って、どんな暮らしをしているのか知りたかった。「福島に行きたい！」と思いながら、行くことが憚られていた。大変な状況下にあることはもちろん承知しているから、ただ「知りたいから行く」というのは身勝手が過ぎると思っていた。たまたまその年の7月に岩手県の遠野に行く用事があり、用事を済ませてからボランティア組織の「遠野まごころネット」に登録をして岩手県の沿岸部の、瓦礫片付けに参加した。津波を被った家屋の家の中の片付けだった。被災地のために、私でもできることがあることを知った。それなら福島に行くのも、ボランティアとして行けば良いと思い至った。そして8月、南相馬へ行った。それが初めての福島行だった。泊まった宿が現地の民間ボランティアグループの拠点で、その仲間に加わって仮設住宅に支援物資を配ったり、イベントを催したりしながら、仮設住宅で生活する人たちから話を聞いた。そうして見聞したことを他の人たちにも知って欲しくて、ブログで発信したり雑誌に寄稿していった。だが、私の言葉からではな

く、現地の被災当事者が語る声を直接聴いて欲しいと思った。セッションハウスの伊藤孝さんに相談すると、即「やりましょう」と応えて下さり、震災から1年後の2012年3月に「渡辺一枝トークの会 福島の声を聞こう！」開催の運びとなった。その第1回には、私が南相馬へ行くたびにお世話になっているビジネスホテル六角のオーナーで、現地ボランティアグループ「六角支援隊」隊長の大留隆雄さんと「希望の牧場」の吉沢正巳さんに話していただいた。私の体を通した言葉よりも当事者の声を通して当事者の言葉で語られる事実は、より現実味を帯びて参加者の体に染み入ったと思う。それからも大体3、4ヶ月に一度くらいの割合で不定期に続けてきて、この2月で43回目を迎えた。11年間続けてこられたのも、セッションハウス・ギャラリーが場所を提供してくれたからだ。43回の内、2回はギャラリーではなく地下スタジオで催した。昨年亡くなった飯館村の長谷川健一さんの講演と長谷川さんが自ら撮影した『飯館村 わたしの記録』上映会、そしてもう1回は、南相馬から京都市綾部に避難している井上美和子さんの「ほんじもよう語り」だ。ギャラリーでのトークも、ゲストスピーカーは映像を使ったり写真を展示したりで、話の内容がより鮮明に伝わってきた。また昨年は、南相馬から大津市に避難した青田恵子さんが、布絵展を同時開催して話してくださった。

東日本大震災・東京電力福島第一発電所事故から、丸12年。卯年がまた巡ってきた。この間政府は、やれ常磐線が開通したの、復興オリンピックだの、大熊町の復興拠点が避難指示解除になつただの、「復興」を声高に喧伝してきた。だが帰還困難区域は12年経っても地震で傾いたままの屋根がそのまま残る家屋、人が住まなくなつた地域の家屋は野生動物に荒らされ、蔓草に覆われ、田畠はすっかり原生林のようになってしまった。そしてまた、「復興」と称した箱物や公園を造るために里山は切り崩され採掘・採土されて見るも無惨な有様となり、被災者は避難先から戻れぬまま浮草のような心地で過ごす人もいる。避難先から戻った人も以前のコミュニティは消えて、暮らしの再建ができる人も少なくない。

鉄道や道路の再開や開通、商業施設や学校、役場など箱物が新設されることを復興と言っているが、住民の心は置いてきぼりにされたままで復興などと言えるだろうか。このような動きに抗して、脱・反原発運動に取り組む仲間たちが、各地で様々な活動を続けている。研究者や運動家を招いての講演会も催されている。私はこれからも被災当事者の生の声を聞く、この「トークの会 福島の声を聞こう！」を続けていこうと思う。

◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆

断絶の時代と言われるようになって久しい。ネット・コミュニケーションが盛んになったのに比例して、逆に共通性ではなく断絶が土台をなすような閉じた世界が拡がっている感がします。「公共」とは縁のないロスト・ジェネレーションの時代の到来とも言われる現在です。しかし、セッションハウスはそれとは一線を異にして、1991年の創設以来、独立した個々人がセッションしあうことから公共の場=土台を創ることを目的として活動をしてきました。そうした一人ひとりの声が響き合っているのに耳を傾けて下さればとの想いから、この機関誌の編集を終えたのでした。(T.I.)